



◇札幌市の成果と課題を踏まえ、以下の3点を重視して学校での学びを改善していく必要がある。
○子どもが、学ぶことの意義や楽しさを感じ取り、自ら学び続けようとする意欲をもつこと。
○子どもが、自ら考えたり表現したりするなどの多様な学びを経験し、思考力・判断力・表現力等を身に付けること。
○子どもが、学び続けるための基礎的・基本的な知識や技能を身に付け、新たな学びに自信をもって挑戦していけるようになること。

◇学校での学びの質を高め、家庭と一体となつて「学ぶ力」を育むことを目指して、さっぽろっ子「学ぶ力」の育成プランを実施する。

令和4年度 さっぽろっ子「学ぶ力」の育成プラン

「札幌市教育振興基本計画」(平成26年度～)に位置付けて推進

◆分かる・できる・楽しい授業づくりの充実

「子どもが自ら考え、判断し、表現する学習活動」の充実

○自ら疑問や課題をもち、主体的に解決する「**課題探究的な学習**」を取り入れた授業の工夫改善を図る。
*「6つのセルフチェック」の活用による授業づくりの充実
*小学校5・6年生算数における少人数指導「算数に—こ—プロジェクト事業」の実施

学ぶ意欲の向上

知識の理解の質を高め、
資質・能力を育む
主体的・対話的で深い学び

*言語活動や体験的な活動等の充実
*ICTを活用した学習活動の充実

「自分への自信につながるきめ細かな指導」の充実

○基礎的・基本的な知識及び技能の定着を図り、子どもが分かる・できる喜びを実感できるよう、**個に応じた指導の充実**を図る。
*生きて働く知識・技能の習得に向け、知識・技能の活用場面を位置付けた授業の充実
*一人一人のよさや伸びを認める指導と評価の一層の充実

5つのポイント

- 1 難しいことにも挑戦する意欲を伸ばします。
- 2 「自ら学ぶ方法」と「人と学び合う方法」を身に付けられるようになります。
- 3 意味理解を伴った知識の習得と、知識を使いこなす力を伸ばします。
- 4 自分の「伸び」を実感して、新たな目標をもてるようになります。
- 5 生活を自らコントロールする力を育みます。

各学校が「学ぶ力」育成プログラムを改訂し実行

○各学校が、自校の子どもの「学ぶ力」の実現状況を踏まえて、指導方法等の課題を明確化し、改善に向けて作成したプログラムの改訂、実行に取り組む。(教育課程等への位置付け、指導方法の改善など)

具体的な改善策について
教育委員会が支援

教員の指導力向上
に向けた施策

札幌市教育課程編成の手引の活用
○学習指導要領の趣旨及び小中のつながりを踏まえた授業改善の推進

幼小中合同教育課程研究協議会等
○学習指導要領の実施を踏まえた教育課程や授業の在り方を協議

札幌市教育研究推進事業
○分かる・できる・楽しい授業に関する研究の推進
○学習指導要領の実施に向けた研究の推進

札幌市教員研修計画に基づいた研修
○授業づくりに関する研修の充実

◆包括的重点における「学ぶ力」の育成

「小中一貫した教育」の推進(校種間連携)

○系統性・連続性のある「**課題探究的な学習**」の充実
・パートナー校連携による**協働的な授業改善**や**授業像の一貫性**
・指導内容の系統性・連続性を重視した**教育課程の工夫改善**
・「学ぶ力」育成に向けた取組の**成果と課題の共有**
・**授業改善の視点**からの**授業交流**や**合同研修会**の実施
・**小中一貫した教育グランドデザイン**の活用



ICTを活用した教育の推進(情報教育)

○ICTの効果的な活用による「**課題探究的な学習**」の充実
・**学習ツール**として授業や様々な教育活動で**学びの質を高める活用**
・ICTの特性や強みを活かし、**思考を深める学習の過程を重視した個別最適**な学びと協働的・一体的な充実
・プログラミング的思考及び情報モラルを含む**情報活用能力の育成**
・**端末の持ち帰り**等による**授業と家庭学習の接続**と**習慣づくり**

さっぽろっ子「学び」のススメの活用

学校・家庭・地域の連携・協働

○**家庭や地域への情報発信の充実**
※「社会に開かれた教育課程」の理念に基づき、家庭や地域との共通理解のもとで「学ぶ力」の育成に向けた取組を推進
・各学校の取組状況についての**情報発信の充実**
・札幌市PTA協議会をはじめとする**関係機関との連携**

学校・家庭・地域をつなぐ
さっぽろっ子 三つの「ススメ」



校長会との連携・協働

○**双方向による「学ぶ力」の育成**
※校長会との多様な機会における双方向の連携を強化
・各区の研修会等への**指導主事の派遣**
・各学校の研修会等の充実

(その他)
学生ボランティアの活用などの環境整備

検証改善

改善

◆子どもの自己評価を生かした「学ぶ力」の評価と指導の改善

○教育施策や教育指導の改善に反映するため、札幌市全体の共通指標を設定し、「学習などについてのアンケート」と「ICTの活用についてのアンケート」として実施することで、子どもの学習やICTの活用状況等を把握するとともに、各学校で調査結果を子どもや家庭と共有し、活用するなどの取組の充実を図る。

検証改善サイクルの確立

評価

札幌市学校教育の重点の基盤
人間尊重の教育
子ども一人一人が「自分が大切にされている」と実感できる学校づくり

札幌市における子どもの「学ぶ力」の現状

国際的な学力調査から明らかとなっている日本の子どもの学力状況も踏まえつつ、全国学力・学習状況調査結果や札幌市学習実現状況調査等の各種調査結果を総合的に分析し、札幌市の子どもの「学ぶ力」について、**札幌市の成果と課題**をまとめた。

参考 1

■札幌市における全国学力・学習状況調査及び札幌市学習実現状況調査の傾向

令和3年度全国学力・学習状況調査

小6、中3が対象（令和3年5月実施）
小学校調査は、国語、算数
中学校調査は、国語、数学

【小学校】 ⇒国語、算数のいずれも、全国平均正答率と「ほぼ同程度」

【中学校】 ⇒国語、数学いずれも、全国平均正答率と「ほぼ同程度」

※「ほぼ同程度」は、全国の平均正答率と比較して±3ポイントの範囲内。

札幌市学習実現状況調査

小5、中2が対象（平成30年2月実施）
小5では社会、中2では社会・英語について「基礎に関する問題」と「応用に関する問題」

【小学校】社会…期待される正答率（設定通過率）と「ほぼ同程度」

【中学校】社会…期待される正答率（設定通過率）と「ほぼ同程度」
英語…期待される正答率（設定通過率）を上回っている。

※「下回る」は、全国の平均正答率と比較して3.1ポイント以上、下回る状況。「上回る」は、全国の平均正答率と比較して3.1ポイント以上、上回る状況。

- ◆国語では小学校は「目的に応じて文章と図表とを結び付けて必要な情報を見付けること」、中学校は「文章に表れているものの見方や考え方を捉え、自分の考えをもつこと」、算数・数学では「判断の理由や解決の方法を考察し、数学的に表現すること」などに課題。身に付けた知識・技能を活用することについて、小中学校ともに課題。
- ◆社会・英語では、目的や状況に応じて、考えたことを表現することについて、小中学校ともに課題。

■札幌市の子どもの学習習慣と学習意欲

令和3年度全国学力・学習状況調査

■自分で計画を立てて勉強している子どもの割合は、小学校、中学校ともに、前回調査と比べ大きく増加している。これまでの調査と比べて最も高い状況である。※()内は全国平均

平成20年度：小52.2% (52.0%) 中37.4% (34.2%)
令和元年度：小69.6% (71.5%) 中46.4% (50.4%)
令和3年度：小77.0% (74.0%) 中62.2% (63.4%)

■自分にはよいところがあると思う子どもの割合は、これまで上昇傾向にあったが、小学校においては、全国と同様に前回調査と比べ減少している。※()内は全国平均

平成19年度：小70.7% (71.5%) 中62.5% (60.5%)
令和元年度：小78.2% (81.2%) 中73.5% (74.1%)
令和3年度：小72.2% (76.9%) 中74.0% (76.2%)

■将来の夢や目標をもっている子どもの割合は、小学校、中学校ともに、全国と同様に前回調査と比べ減少している。※()内は全国平均

平成19年度：小81.5% (83.7%) 中69.2% (70.7%)
令和元年度：小81.0% (83.8%) 中68.3% (70.5%)
令和3年度：小77.6% (80.3%) 中64.4% (68.6%)

■難しいことでも、失敗を恐れずに挑戦している子どもの割合は、これまで上昇傾向にあったが、小学校、中学校ともに、全国と同様に前回調査と比べ大きく減少している。※()内は全国平均

平成19年度：小69.8% (72.3%) 中62.7% (62.0%)
令和元年度：小74.9% (79.0%) 中67.6% (70.3%)
令和3年度：小66.5% (70.9%) 中58.9% (65.9%)

札幌市の児童生徒の実態に関する基礎調査

- 令和2年度の調査では、家庭での学習時間について、「ほとんどしない」と回答した割合は、中2で過去の調査と比較し最も低くなっている。
- 前回調査（平成29年度）と比べて、中2と高2では、家庭での学習時間について、「2時間程度」「3時間程度」「4時間以上」と回答した割合の合計は増加し、「ほとんどしない」と回答した割合は減少している。

- ◆家庭での学習習慣については、意欲を高める関わりを一層行うとともに、生活習慣・運動習慣等と併せて改善を図ることが課題。

■国際比較による日本の子どもの学力

TIMSS2019 国際数学・理科教育動向調査

小4、中2が対象
算数・数学、理科の
知識・技能の習得状況

【小学校】算数5位(58か国中)、理科4位(58か国中)
【中学校】数学4位(39か国中)、理科3位(39か国中)

「小学校・中学校ともに国際的に見ても引き続き高い水準を維持している。前回調査に比べ、小学校理科では平均得点が有意に低下している一方、中学校数学では平均得点が有意に上昇している。

「算数・数学、理科について楽しい、得意だと思う児童生徒の割合が増加し、数学、理科を使うことが含まれる職業につきたいという生徒の割合が増加。」(文部科学省資料より抜粋)

PISA OECD生徒の 学習到達度調査

15歳が対象。義務教育修了段階で身に付けた知識や技能を実生活の様々な場面でどの程度活用できるか。

■数学的リテラシー

様々な文脈の中で数学的に定式化し、数学を活用し、解釈する個人の能力
2015年 5位(72か国・地域中) 2018年 6位(79か国・地域中)

■科学的リテラシー

科学的な考えを持ち、科学に関連する諸問題に関与する能力
2015年 2位(72か国・地域中) 2018年 5位(79か国・地域中)

■読解力

自らの目標を達成し、知識と可能性を発達させ、社会に参加するために、テキストを理解し、利用し、評価し、熟考し、これに取り組むこと

2015年 8位(72か国・地域中) 2018年 15位(79か国・地域中)

- 数学的リテラシー及び科学的リテラシーは、日本は引き続き平均得点が高いグループに位置。
- 読解力は、平均得点が高いグループに位置するが、前回より平均得点が順位が統計的に有意に低下。

読解力については、2009年から2015年調査まで用いられた定義が変更され、「書かれた」という語が削除された。これは、問題がコンピュータ使用型に移行したことによる。

札幌市全体の共通指標「学習などについてのアンケート」と「ICTの活用についてのアンケート」の結果

※数値はいずれも「当てはまる」「どちらかと言えば当てはまる」など、肯定的な回答の割合を示している。

質問項目は「学ぶ力」の育成に向けた5つのポイントを中心に分類しています。

令和3年12月実施

学習などについてのアンケート 集計（令和3年度）

ICTの活用についてのアンケート 集計（令和3年度）

質問	小学校	中学校
■相互承認（自己承認、他者への承認、他者からの承認）		
1 自分にはよいところがある。	78.7%	76.8%
2 友だちのよいところを見付けようとしている。	89.3%	91.4%
3 自分が必要とされていると感じる。	61.5%	60.7%
4 人の役に立ててうれしいと感じることがある。	92.4%	93.1%
5 人の役に立つ人間になりたいと思う。	94.3%	93.5%
■「自ら学ぶ方法」と「人と学び合う方法」 【「学ぶ力」育成の5つのポイント】		
6 自分が思っていることや感じていることを人に伝えている。	70.6%	71.7%
7 自分なりの疑問や課題をもって学習に取り組もうとしている。	78.1%	76.1%
8 疑問や課題を解決するために、自分で方法を考えるようにしている。	79.8%	79.7%
9 自分の意見を進んで発言しようとしている。	62.0%	47.8%
10 友達の意見や先生の話が終わるまで聞いている。	89.4%	90.8%
11 意見の違う人とも、よく話し合おうとしている。	81.3%	84.4%
12 分からないことがあったときに、友達や先生に聞くようにしている。	85.3%	83.3%
13 学習で困っている友達に声をかけたり一緒に考えたりするようにしている。	84.1%	80.1%
14 学習の中でコンピュータなどのICT機器を役立てている。	87.5%	82.8%
■意味理解を伴った知識の習得と知識を使いこなす力 【「学ぶ力」育成の5つのポイント】		
15 新しく学んだことを、他の学習や生活の場面で使おうとしている。	82.2%	78.4%
16 意見を書くときには、その理由をはっきりさせて書くようにしている。	77.6%	81.1%
17 意見を発言する前に、自分の考えがうまく伝わるように、話の内容や順序を考えている。	72.3%	75.9%
18 人の意見を聞いて、それを参考にして自分の考えを見直すことがある。	86.9%	90.7%
■自分の「伸び」を実感して新たな目標をもつ 【「学ぶ力」育成の5つのポイント】		
19 振り返りを通して、自分の伸びや成長を感じることもある。	73.0%	73.8%
20 振り返ったことを、次に生かそうとしている。	81.9%	85.3%
■生活を自らコントロールする力 【「学ぶ力」育成の5つのポイント】		
21 1日の時間の使い方を自分で考えて生活している。	71.8%	64.5%
22 自分で計画を立てて勉強している。	66.8%	54.4%
■難しいことにも挑戦する意欲 【「学ぶ力」育成の5つのポイント】		
23 分からないことはそのままにせず、分かるまで努力するようにしている。	75.3%	74.7%
24 自分でやると決めたことは、やり遂げるようにしている。	82.6%	82.8%
25 難しいことでも、失敗を恐れなくて挑戦している。	71.3%	65.3%
■その他		
26 将来の夢や目標をもっている。	79.7%	64.5%
27 読書は好きである。	77.3%	72.5%
28 家の人（兄弟姉妹は含みません。）と学校での出来事について話をする。	80.8%	75.8%
29 外国の人と交流する機会をもちたいと思う。（話をしたり、一緒に何かの活動をしたりするなど）	64.7%	57.7%
30 札幌には、好きな場所やものがある。（自然、建物、イベント、歴史、文化など）	91.8%	85.7%

質問	小学校	中学校
■学ぶ意欲		
1 端末を使うことで、勉強がおもしろい、楽しいと思うことがある。	90.6%	84.6%
■「自ら学ぶ方法」と「人と学び合う方法」 【「学ぶ力」育成の5つのポイント】		
2 疑問や課題を解決するために、端末を使って自分なりに調べようとしている。	85.3%	87.4%
3 端末を使った交流で気付いたことを自分の学習に取り入れようとしている。	76.8%	76.0%
4 端末を使う活動で、自分の意見を進んで伝えようとしている。	69.9%	65.3%
5 端末を使う活動で、友達の意見を進んで知ろうとしている。	81.8%	81.9%
6 家庭で端末を活用することで、学習が充実している。	68.4%	63.3%
7 プログラミングの学習では、繰り返し試しながら改良していくおもしろさを感じる。	72.3%	61.1%
■意味理解を伴った知識の習得と知識を使いこなす力 【「学ぶ力」育成の5つのポイント】		
8 端末のアプリケーションを自分で選んで、学習を進めている。	74.5%	60.5%
9 端末のアプリケーションを使うことで、いろいろな表現をすることができるようになったと感じる。	76.6%	68.8%
■自分の「伸び」を実感して新たな目標をもつ 【「学ぶ力」育成の5つのポイント】		
10 学習の中で端末を使うことは、勉強の役に立つと思う。	93.1%	88.8%
11 端末を使いながら学習することは、将来の役に立つと思う。	89.3%	89.8%
■生活を自らコントロールする力 【「学ぶ力」育成の5つのポイント】		
12 端末やスマホ等のICT機器を使うときは、夜遅くにならないなど、時間帯に気を付けて使っている。	72.4%	59.4%
13 授業以外で端末を使うときは、時間が長くないよう、使う時間の長さを自分で決めている。	66.2%	52.9%
14 インターネットの特性や著作権、個人情報の扱い方について考えながら端末を活用している。	89.2%	90.9%
15 端末・アカウント（ID）・パスワードを適切に取り扱っている。	91.8%	94.7%

成果と課題

【着眼点①】相互承認（自己承認、他者への承認、他者からの承認）
 学習などについてのアンケートの「2」の他者への承認に係る項目においては、肯定的な回答の割合が高く、他者を価値のある存在として尊重する意識が高いと捉えられる。一方、「4」「5」のように他者からの承認に係る項目においては肯定的な回答の割合が高いものの、「1」「3」のように自己承認に係る項目は、他の項目に比べると低い。他者から承認される喜びや大切さを感じながらも、自分を承認することには結び付いていないと捉えることもできることから、子ども一人一人が自分のよさや可能性を気付いていくことが課題である。

【着眼点②】ICT活用と対話的な学び
 ICTの活用についてのアンケートの「1」「10」「11」の項目において、肯定的な回答が多く、端末を活用した学習の楽しさや有用感を実感していると捉えられる。一方、学習などについてのアンケートの「9」、ICTの活用についてのアンケートの「4」の項目において、他の項目に比べると、肯定的な回答の割合が低く、子どもが表現する学習活動の更なる充実が課題であり、ICTの効果的な活用によって思考が深まる対話的な学びをより充実していくことが重要である。

【着眼点③】習慣づくり
 学習などについてのアンケートの「21」「22」、ICTの活用についてのアンケートの「12」「13」の項目において、肯定的な回答の割合が低い。学校と家庭が連携・協働して、端末活用を前提とした習慣づくりをしていく必要がある。